

2016 年度第 2 回勉強会

日時：2016 年 12 月 22 日（木）13:00－16:00

場所：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）33 号館 3 階 第一会議室

今回の勉強会では、日野研究室の大学院生だけでなく、中央大学大学院兵藤研究室の大学院生にも加わっていただき研究発表を行います。参加自由ですので、ご希望の方は、是非、ご参加下さい。

発表

1. 水越陸太(早稲田大学大学院文学研究科)「漢字熟語のファミリーサイズ効果と語長効果」

Taft 等によれば、複合語を読む際、まず語を構成する形態素の表象が活性化され、語全体レベルの表象に統合される。漢字は個々に意味を持つ形態素であるため、複数の漢字で構成された漢字熟語は複合語であり、同様のプロセスを仮定できる。また、低頻度複合語において形態素のファミリーサイズが課題成績に効果を持つことが他言語の研究で知られている。本実験では、このファミリーサイズの効果が漢字三字熟語でも観察されるかを検討した。もし、このファミリーサイズの効果が漢字三字熟語で観察された場合、先行研究で報告されている漢字熟語における語長効果のメカニズムとの関連が考えられる。この点についても本実験で検討し、漢字熟語の読みのプロセスを追究した。

2. 薛俊毅(早稲田大学大学院文学研究科)「漢字熟語における促音化と連濁の音韻符号化プロセスの本質」

本研究では、漢字熟語に対する“促音化”と“連濁”という 2 つの現象に注目し、音韻符号化プロセスで計算される音韻情報の性質について検討した。促音化や連濁といった音韻変化した語(e.g., 発見, 言葉)の音韻符号化プロセスにおいては、音韻変化後の音韻情報ではなく(e.g., /ha.Q.ke.N/, /ko.to.ba/), 音韻変化前の読みに対応した音韻情報(e.g., /ha.tu.ke.N/, /ko.to.ha/)が活性化される可能性がある。そこで、それぞれの音韻情報による一貫性を操作した音読実験を実施した。実験の結果、音韻変化前の音韻情報による一貫性効果のみ観察された。したがって、音韻変化した語の音韻符号化プロセスでは、個々の漢字の読みに対応した、音韻変化前の音韻情報(e.g., /ha.tu.ke.N/, /ko.to.ha/)が計算され、その後のプロセスにおいて促音化や連濁などの処理が行われるものと思われる。

3. 井田佳祐(早稲田大学大学院文学研究科)「漢字表記・仮名表記における N170 の左半球優位性」

フランス語やドイツ語を使用した ERP 研究において、語、非語、子音列を提示した際、非文字列を提示した場合に比べて N170 が増加することが報告されている。さらに、ドイツ語では語と非語いずれにおいても N170 は左半球優位であったのに対し、英語では語による N170 は左半球優位であったものの、非語による N170 は両側性であった。このことから、N170 の左半球優位性には表記の書記素-音素対応の規則性が関与している可能性が示されている。本研究は日本語の漢字表記と仮名表記の語・非語を使用し、N170 の左半球優位性と書記素-音素対応の規則性の関連について再度検討を行う。

4. 吉原将大(早稲田大学大学院文学研究科)「潜在的プライミング・パラダイムによる音韻単位の検討」

我々が言葉を発するときには、音素や音節、モーラといった、ある大きさの音韻情報（音韻単位）を基に語の音声出力を組み立てていると考えられている(O'Seaghdha et al., 2010)。これまで音韻単位の検討には主に発話課題が用いられてきたが(e.g., Meyer, 1990)、近年、音読課題を用いた研究も報告されている(Verdonschot et al., 2011; Yoshihara et al., submitted)。そこで本研究では、潜在的プライミング手法による発話課題と音読課題を用いて、課題の性質が音韻情報の組み立てに影響を及ぼす可能性について検討した。

5. 李岩(中央大学大学院文学研究科)音韻情報と形態情報の類似性が四字熟語の正誤判断に及ぼす影響—日本語に熟達している中国語母語者における日本語と中国語の読みについて—

単語認知処理において、日本語母語者は、母語、非母語を問わず形態情報への依存度が高い(水野・松井, 2007)。また、日本語母語者の形態情報への依存度は、中国語母語者の形態情報への依存度よりも高いことが明らかにされている(松井・水野, 2008)。四字熟語のような特殊な語彙の認知過程にどのような影響をもたらすかという問題を検討するため、本研究では日本語を第二言語とする中国語母語者と日本語母語者を実験対象とした。実験材料は日常生活でよく使われ、一つの意味としてのまとまりがあるため、四字熟語を用いた。課題では四字熟語（日本語と中国語）とその形態が類似した同音非言語の正誤判断課題、形態符号化を妨害する複雑タッピング課題及び音韻符号化を妨害する同時構音抑制課題の二重課題を用いることで、視覚的に語を認知する際に形態情報から受けた影響について検討する。

6. 佐藤研一郎(中央大学大学院文学研究科)ネガティブな熟語への潜在的選好の変容についての検討—学習した熟語への選好—

近年、意識的な統制が困難な態度や感情についての研究が増えている。藤井(2013)は熟語の感情価に注目し、学習したニュートラル語についての顕在的・潜在的選好について検討を行っている。その結果、学習語と非学習語を比較すると、学習語に対する潜在的な選好がみられたが顕在的な選好はみられなかった。しかし、藤井(2013)はニュートラル語についての検討であり、感情価を伴った熟語については検討されていない。そこで本研究では、学習したネガティブ語についての潜在的・顕在的な選好について検討を行う。